

クワガタと考古学

宮崎でクワガタといえばノコギリクワガタ&ヒラタクワガタ、そして男の子（あるいはお父さん？）のあこがれはミヤマクワガタ、そして滅多に採れないオオクワガタでしょうか。意外にコクワガタの人気も侮れませんね。今回は、そんなクワガタと考古学のはなし2題。

＊

まずは宮崎で出土したクワガタのはなし。1996年2月、串間市をながれる福島川の河床からクスノキが掘り出されたのですが、なんと根本の直径185cm・樹高19m以上・樹齢約500年という大木です（掘り出されたクスノキは宮崎県総合博物館の正面入り口で展示中）。そして、クスノキにあいた空洞の中から、ネプトクワガタ6匹（♂3/♀2/不明1）が発見されたのです。クスノキが埋まっていた地層は、縄文海進に伴う地層と弥生土器を含む地層とにはさまれており、クスノキやネプトクワガタは、縄文海進から弥生時代までのものだろうと推測されました。そして、より精度を上げるため、クスノキとネプトクワガタについて放射性炭素年代測定がなされ、おおよそ縄文時代の終わり頃から弥生時代にかけてのクスノキ、ネプトクワガタであると実証されました。今の福島川河口付近には、弥生時代に樹齢500年にもなるようなクスノキの生える豊かな森が広がっていたことを示す重要な発見となったわけです^{※1}。



綾町内の林道沿いのニレにいた現生のネプトクワガタ（2016年9月21日撮影）

先日、台風16号が過ぎてなお元気に樹液に集まるネプトクワガタを見かけました（写真）。彼らの先祖は、弥生時代にたしかに生きていたのであり、少なくともこの2,000年以上にわたり累々と世代を重ねてきたのかと思うと、スイカの種のように小さなネプトクワガタも大きく見える気がした次第。

＊

他所にない宮崎の魅力の1つに豊かな自然がありますが、どこにでもクワガタがいるのではありません。クワガタ目線でみると・・・クワガタのいるクヌギ林とは、シイタケ栽培等のために植栽していること、クワガタのいないスギやヒノキの林やサクラ並木だけれど、それぞれ豊かな木材資源として代々管理されてきた歴史の賜物であり、花を愛でる日本文化そのもののような存在であること等々。また、史跡整備の際に当時の植生等を反映した樹種を意図的に残したことで、クヌギやニレがなくとも、タブノキやアカメガシワ等の生えるクワガタが集まる林が再生されたこともあるようです。クワガタ目線で気付かされたこれらの事例は、いずれも人が関与することで作られそして受け継がれてきた自然なのであり、その延長上に今、目の前に広がる風景があるといえます。博物館から何気なく目にしていた西都原古墳群の自然でしたが・・・その自然の背後にある歴史や文化に思いをはせると、同じ風景も今までとは違って見えつつある今日この頃です。

（藤木 聡）

※1 昆虫と考古学のことをもっと知りたいという方には、森 勇一さんの『ムシの考古学』（雄山閣、2012年）がオススメ。串間のネプトクワガタのことも紹介されています。また、串間のネプトクワガタの詳細は、以下の論文に出ています。機関リポジトリからダウンロード可能です。

長岡信治・河野和生・伊東嘉宏・奥野 充・中尾登志雄・森 勇一・大平明夫・長谷義隆・杉山真二・中村俊夫 1998「宮崎県串間市、福島川下流域の沖積層中の埋没クスノキの年輪とそのAMS¹⁴C年代」『タンデトロン加速器質量分析計業績報告1997（平成9年度）名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 9、pp.260-271、名古屋大学